

# 出産前に失明「顔見たい」

## iPS視細胞移植へ

「私に似ているという息子の顔を見たい」。もし視力が回復したら何をしたいかと尋ねると、失明した母親はすぐに答えた。神戸アイセンター病院で始まる人工多能性幹細胞（iPS細胞）を用いた視細胞移植。当面は安全確認が主目的だが、対象になる難病「網膜色素変性症」の患者には、希望の光が差し込んでいる。（1面参照）

### 息子が小学1年 宝塚の42歳女性



宝塚市の音楽家、前川裕美さん(42)も臨床研究に期待を掛ける一人だ。5歳のころから目が悪く、幼稚園からコンタクトレンズをしていたが、矯正視力は0.5程度。自宅近くの眼科に通い、片目に眼帯を着けて階段の上り下りをする訓練などを続けたが、あまり効果はなかった。一方で視野はどんどん狭くなった。小学校のドッジボールでは、投げられた瞬間消えたボールが、急に目の前に現れた。中学生になると、友人の顔が部分的にしか見えなくなった。小学5年生で病院を紹介され、網膜色素変性症と診

断されたとき、医師から言われた四つの言葉を覚えていた。「治療法はない」「遺伝する」「悪化する」「いざれ失明する」。特に四つ目が心に刺さった。「花や空も、いつか見られなくなっちゃうのかな」

幼少期から学んだ音楽が支えになった。5歳からピアノ、中学から作曲理論、高校から音楽を始め、大学はアメリカの名門「パーカー音楽大学」に進んだ。2003年に帰国し、音楽活動や講演活動を続ける。14年からは宝塚市大使も務

「見えるようになった時のため、子どもの写真や動画を撮影しておいてと夫にお願いしています」と話す前川裕美さん＝宝塚市内

## 「治療法ない」から希望の光

結婚したのは06年。同疾患は遺伝の可能性があるとされ、子どもをつくることにためらいがあった。だが、iPS細胞による再生医療の話が聞こえてくるようになり、医療の進歩を信じて出産を決意した。ついに視力が失われたのは、長男が生まれた年だった。「どんなに見えづらくても、見えていたことは、私が生きていく大きな支えになっていた」と前川さん。移植手術がいよいよ始まると聞き、「見たいものはいっぱいあるが、一番は、一度も見ることがない息子の顔。まだまだ先とは分かっていないが、期待を抑えられない」と話す。長男は今年、小学1年生になった。

（霍見真一郎）

9月16日月曜日 神戸新聞分

先日の医療系生徒向けの記事のまとめの一助になれば、見えていた目が、楽しみ(子との出会い)に反比例して、老と失い、どんな姿を想像しながら日々を過ごされていたか、新たな生活と出会い、喜びに溢れた日々を迎えられと良いですね。